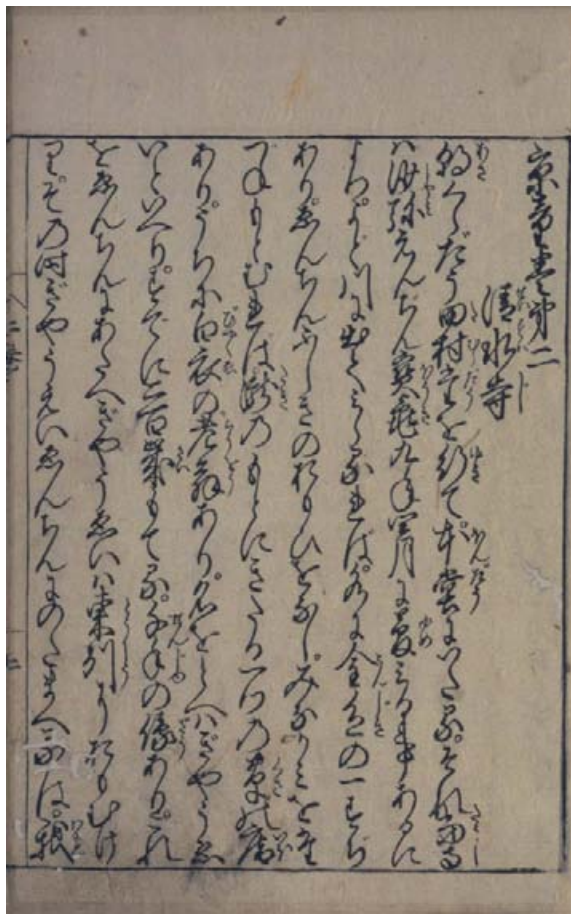
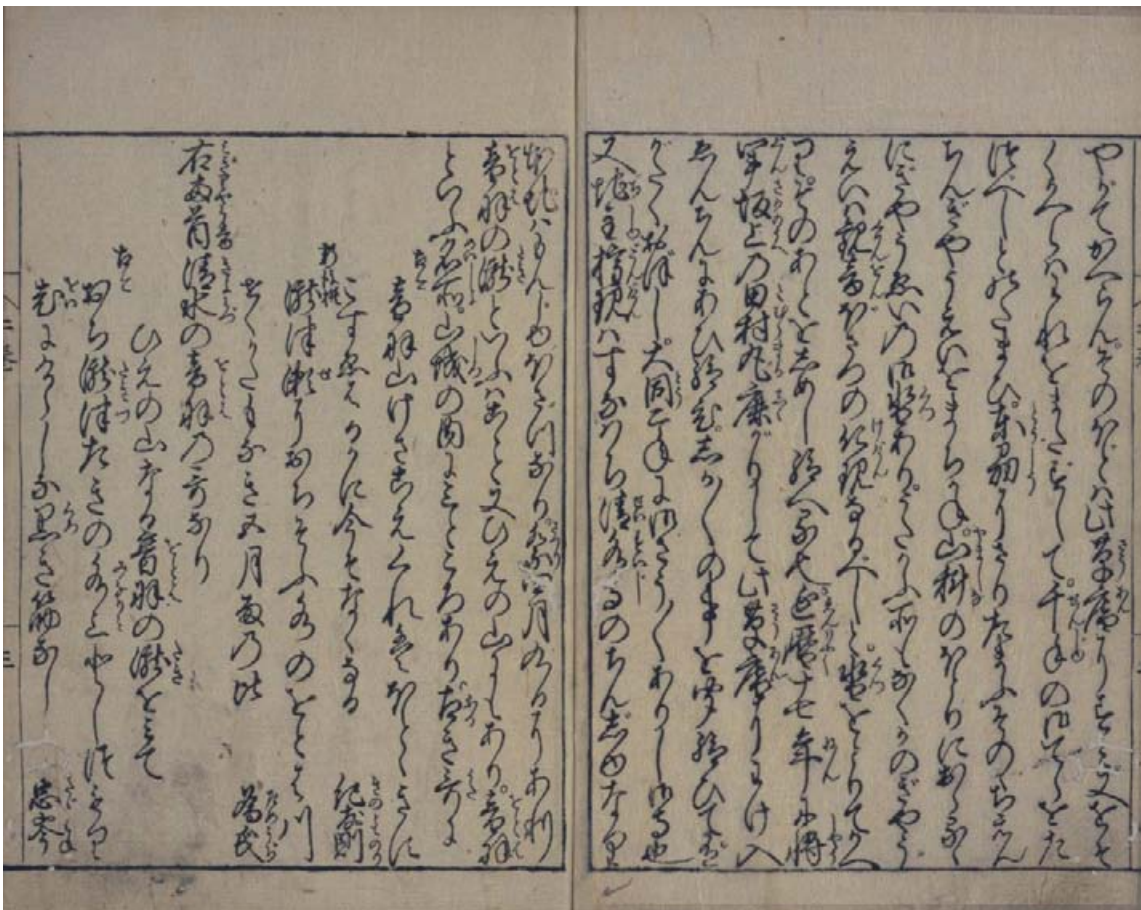


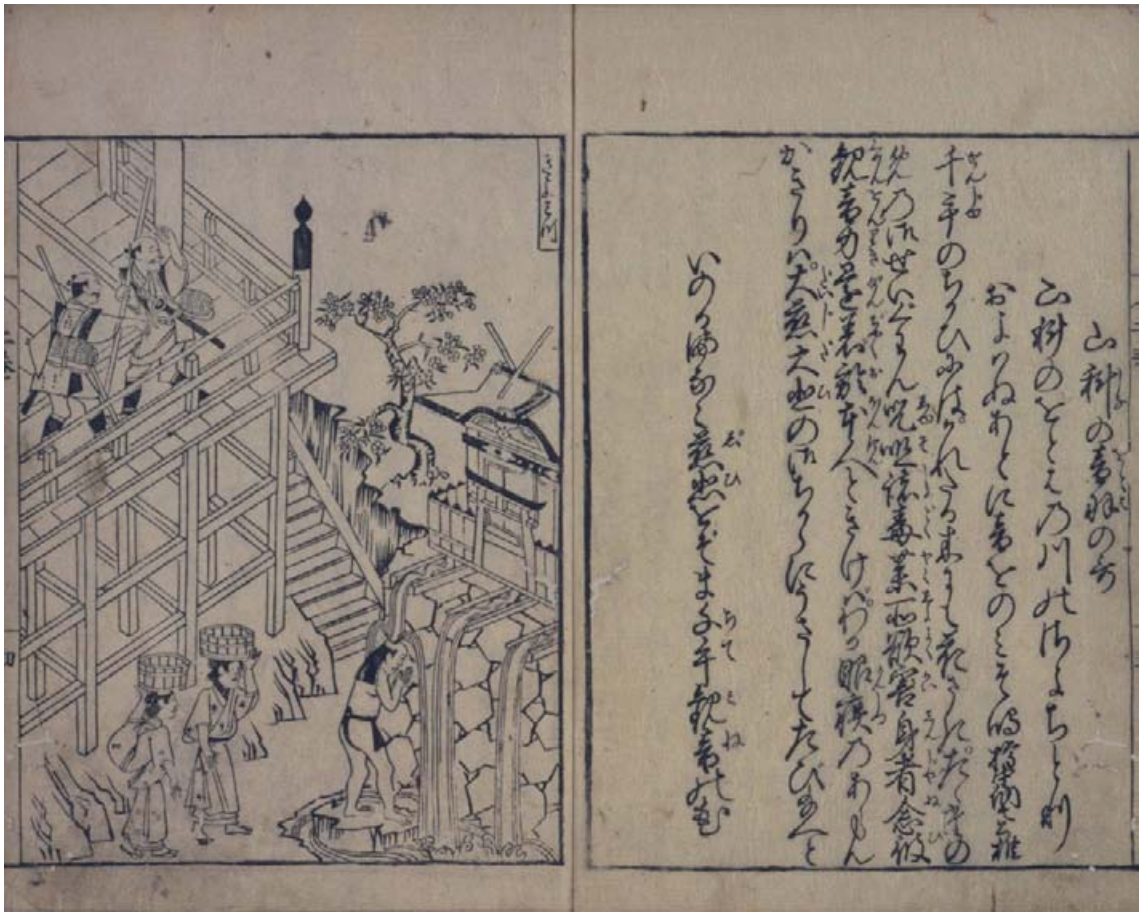
卷二「清水寺」



京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵

【原文】

清水寺

朝くらだう田村堂を行て。本堂にいたる。それ当寺
 は沙弥えんちん宝亀九年四月に夢みる事あるに
 より。よど川に出てみらるれば。水に金色の一すぢ
 あり。ゑんちんふしきのおもひをなし。みなかみをた
 づねもとむれば。瀧のもとにきたる一つの草の庵
 あり。うちに白衣の老翁あり。名をとへはぎやうゑ
 といへり。すでに二百歳もてる。千手の像あり。これ
 をゑんちんにあたへぎやうゑいは東州におもむけ
 り。そのときやうゑいゑんちんにのたまへるは。我(二才)
 やがてかへらん。そのほどは此草庵にすみ。又をそ
 くかへらはわれをまたずして。千手の御てらをた
 つべしとのたまひ。東州にさりたまふそのうちえん
 ちんぎやうゑいをまちかね。山科のほとりに出らるゝ
 にぎやうゑいの御沓あり。うたかふ所もなくかのぎやう
 えいは観音ぼさつの化現なるべしと。沓をとりてかへ
 り。そのあとをしめし給へる也。延暦十七年に将
 軍坂上の田村丸鹿がりして此草庵にわけ入
 ゑんちんにあひ給ひ。しかくの事を聞給ひて。有

がたくおぼし。大同二年に御さうくありし御寺也

又地主権現はすなはち清水寺のちんじゆなり (二ウ)

本地はもんじゆぼさつなり。祭四月九日にあり

音羽の瀧といふはこゝと又ひえの山にもあり。音羽

といふ名所。山城の内に三どころあり。古き哥に

古今

音羽山けさこえくれはほととぎす

こす多はるかに今そなくなる 紀友則

新後撰

瀧津瀬におちそふ水のをとほ川

せくかたもなき五月雨の比 為氏

右両首清水の音羽の哥なり

ひえの山なる音羽の瀧をみて

古今

おち瀧津たきの水上としつもり

老にけらしな黒き筋なし 忠岑 (三才)

山科の音羽の哥

山科のをとはの川のさよちとり

およはぬあとに音をのみそ鳴 権中納言公雅

千手のちかひには。かれたる木にも花さき。たつたの

めの御せいぐわん呪咀諸毒薬所欲害身者念彼

観音力還着於本人ときけば。わか眼疾のあらん

かきりは。大慈大悲の御ちからにうさしてたび給へと

いのるまなご慈悲をぞま千手観音の花 (三ウ)

【校訂本文】

清水寺

朝倉堂(注1)、田村堂(注2)を行て、本堂にいたる。

それ当寺は、沙彌延鎮(注3)宝龜九年(注4)四月に夢みる事ある

により、淀川(注5)に出てみられるれば、水に金色の一すぢあり。延鎮

不思議の思ひをなし、水上を尋ね求むれば、灌のもとにきたる。一つの

草の庵あり。うちに白衣の老翁あり。名を問へば、行叡(注6)とい

へり。すでに二百歳持てる千手(注7)の像あり。これを延鎮にあたへ、

行叡は東州(注8)におもむけり。

その時行叡、延鎮にのたまへるは、我やがて帰へらん。そのほどは此

草庵にすみ。又遅く帰へらば我を待たずして、千手の御寺を建つべしと

のたまひ、東州にさりたまふ。

そののち延鎮、行叡を待ちかね、山科(注9)のほとりに出らるるに

行叡の御杵あり。疑ふ所もなく、かの行叡は觀音菩薩の化現なるべしと

杵をとりてかへり、そのあとをしめし給へる也。

延暦十七年(注10)に將軍坂上の田村丸(注11)鹿がりして此草

庵にわけ入、延鎮にあひ給ひ、しかじかの事を聞き給ひて、ありがたく

おぼし、大同二年(注12)に御草創ありし御寺也。

又地主権現(注13)はずなはち清水寺の鎮守なり(注14)。本地は文殊

菩薩なり(注15)。祭四月九日にあり。音羽の瀧といふは、ここと又

ひえの山にもあり。音羽といふ名所、山城の内に三どころあり。古き歌

に、
古今(注16)

音羽山今朝越え来ればほととぎす

こずえはるかに今ぞ鳴くなる

紀友則(注17)

新後撰(注18)

瀧津瀬に落ち添ふ水の音羽川(注19)

せくかたもなき五月雨のころ

為氏(注20)

右両首、清水の音羽の歌なり

ひえの山なる音羽の瀧をみて

古今

おち瀧津たきの水上としつもり

老にけらしな黒き筋なし

忠岑(注21) (三才)

山科の音羽の歌

山科の音羽の川のさよちどり

及ばぬあとに音をのみぞ鳴く

権中納言公雅(注22)

千手の誓ひには、枯れたる木にも花さき、ただ頼めの御誓願、呪咀諸毒

薬所欲害身者念彼觀音力還着於本人(注23)と聞けば、我が眼疾の

あらん限りは、大慈大悲の御力にうさしてたび給へと、

祈るまなこ慈悲をぞま千手觀音の花 (三ウ)

【注】

- (1) 清水寺境内にある、越前の朝倉氏によって建てられた堂。
- (2) 清水寺境内にある堂で、以下の創建伝承に出てくる、坂上田村麻呂夫妻・行叡・延鎮の像を祀る。現在は「開山堂」とも呼ばれる。実際の参詣では、田村堂・朝倉堂の順に進んで本堂にたどり着く。
- (3) 平安時代初期の僧。生没年未詳。
- (4) 七七九年。
- (5) 琵琶湖を水源とし、大阪湾に注ぐ川。
- (6) 伝説上の僧。
- (7) 千手観音菩薩。千の手と千の目を持ち、全ての命あるものを救うという慈悲深い菩薩。
- (8) 東国。東方の国。
- (9) 現在の京都市東部、山科盆地一帯を指す地名。
- (10) 七九八年。
- (11) 平安時代初期の武将。坂上田村麻呂。延暦十六年に征夷大將軍となつた。天平宝字二(七五八)年〜弘仁二(八一一)年。
- (12) 八〇七年。
- (13) 現在の地主神社。一般に「地主権現」とは寺院内にその土地の神を祀つた神社をいうが、清水寺内のものが最も有名。
- (14) 清水寺のある土地の鎮守の神。

(15) 地主権現に祀られている神は文殊菩薩の化身と信じられていた。

文殊菩薩は知恵を象徴する菩薩。

- (16) 『古今和歌集』巻二・夏(一四二番歌)。平安時代前期に成立した最初の勅撰和歌集。延喜五(九〇五)年、醍醐天皇の命により、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑が撰進した。全二十巻。読み人知らずの歌と、六歌仙・選者らの歌約一一〇〇首を収め、春・夏・秋・冬・離別・恋など十三部に分けて配列されている。貫之の仮名序と紀淑望の真名序が前後につけられている。
- (17) 平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。貫之の従兄。『古今集』に四十六首入っており、撰者の一人だが、完成前に没した。家集に『友則集』がある。生没年未詳。
- (18) 『新後撰和歌集』巻三・夏(二二三番歌)。嘉元一(一一三〇)年に成立した、十三番目の勅撰和歌集。二十巻。約一六〇〇首。後宇多上皇の命により、二条為世が撰進した。
- (19) 清水寺の音羽の滝を発し、現在の東山区を流れていた川。山科区・左京区を流れる音羽川と区別して清水音羽川ともいう。
- (20) 藤原為氏。鎌倉中期の歌人。為家の長男で、為世の父。二条家の祖。『続拾遺和歌集』の選者。『続後撰和歌集』以下の勅撰集に二三首入集。貞応元(一一三二)年〜弘安九(一一八六)年。
- (21) 『古今和歌集』巻二七・雑上(九二八番歌)。壬生忠岑。平安中期

の歌人。三十六歌仙の一人。忠見の父。『古今集』選者の一人で、古今集以下の勅撰集に八二首入集。家集に『忠岑集』がある。生没年未詳。

(22) 「公雅」とあるが、「公雄」の誤り。この歌は『新拾遺和歌集』巻

一八・雑上(一六九六番歌)に収められる。「公雄」は藤原公雄。鎌倉時代の公卿。小倉家の祖。文永四(一二六七年)、権中納言となる。『続古今和歌集』以下の勅撰集に一一〇首入集。生没年未詳。『新拾遺和歌集』は、貞治三(一二三四)年に成立した、十九番目の勅撰和歌集。二十巻。約一九二〇首。後光厳天皇の命により、藤原為明が撰進したが、途中で没し、頼阿が後を継いで完成させた。

(23) 『観音経』(「妙法蓮華経」観世音菩薩普門品第二十五)の一節。訓読すると、「呪咀や、諸の毒薬により、身を害さんと欲する所の者は、彼の観音の力を念ずれば、本人に還り着かん」となる。

【現代語訳】

清水寺

朝倉堂と田村堂を行くと、本堂に着きます。この寺の由来は次の通りです。

僧の延鎮が宝龜九年四月に夢を見て淀川に出てみられますと、川に金色の一筋の流れを見つけました。不思議に思って上流に行くと、滝の元に着きました。そこに一軒の草の庵がありました。そこに白い衣を着た翁がいました。名を尋ねると行叡といい、すでに二百年持っている千手観音の像がありました。行叡はその像を延鎮に与え、東国へ旅立ったのでした。

その時、行叡は延鎮に「私はまもなく帰るが、その間はこの庵に住みなさい。帰るのが遅ければ私を待たず、千手観音のお寺を建てなさい。」とおっしゃいました。

東国に去られた行叡を延鎮は待ちかね、山科のほとりに出られたところ、行叡の御沓がありました。そこで延鎮は疑うことなく、あの行叡は観音菩薩の化身であったと考え、沓を持ち帰り、化身であったというあかしを人々にお示しになったのです。

延暦十七年に征夷大将軍坂上田村麻呂が鹿狩りをした時、この草庵にたどり着き、延鎮にお会いになりました。先の由来をお聞きになり、尊くありがたいこととお思いになって、大同二年にご創建になったのが清

水寺なのです。

また、地主権現は清水寺の鎮守社であり、元の仏は文殊菩薩です。祭りが四月九日にあります。音羽の滝というのは、ここと比叡山にもあります。音羽という名所は山城国のうちに三箇所あります。古い歌に次のようなものがあります。

『古今集』

音羽山を今朝越えてきたところ、ホトトギスが梢はるかに今鳴いて
いるのが聞こえる

紀友則

『新後撰集』

滝に流れ落ちて加わる水の音がする音羽川だが、その音をおさえる
ことも、水の勢いをとどめることもできない、五月雨のころだ

為氏

右の二首は、清水の音羽を詠んだ歌です。

比叡山にある音羽の滝を見て詠んだ歌

『古今集』

激しく流れ落ちる滝の上流は、年月がたつて老いてしまったに違
ない、流れには、白髪のように白い筋ばかりで、黒い筋が無いから

忠岑

山科の音羽の歌

山科の音羽川の小夜千鳥が、観音様の御行跡に自分の力が届かなく

て、声に出してないばかりいることだ

権中納言公雅

千手観音の誓いでは、枯れた木にも花が咲くとのことで、「ただただ自分の言葉を頼みにせよ」との御誓願や、「呪咀諸毒薬所欲害身者念彼観音力還着於本人（呪咀や毒薬などによつて、身体を害そうとする者がいても、観世音菩薩を念ずれば、呪おうとした本人にその効果が還っていくことになる）」ときくので、私の眼病があるかぎりには、大慈大悲の御力で無くしてくださいませと、次の発句を詠みました。

祈る眼は、千手観音の慈悲がもたらされるのを待つて、峰に花が咲く

（岸本恵美・鳴海伸一）